

植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会

——韓国西洋音楽受容史の一側面として——

金 志 善

はじめに

本論文は、植民地朝鮮（1910～1945）において日本の音楽家が朝鮮を一時訪問して行ったクラシック音楽会の実態を当時の新聞や雑誌記事を基に調べ、彼らが行った音楽会が韓国西洋音楽受容史においてどのような役割を果たしたのかについて考察するものである。

朝鮮における1920年以前の西洋音楽会は、主に、高等女学校やミッション系学校の生徒による声楽が中心だったが、管弦楽などのアマチュア音楽会も行われた。1920年代に入ると、日本や欧米で留学を経験した朝鮮人音楽家によってクラシックの本格的な音楽会が開かれるようになった。それと同時に、日本人音楽家をはじめ、世界各国から著名な音楽家が来朝し、音楽会を開くことで、音楽会のレパートリーは増えることとなった。なかでも、日本や世界を拠点とし、音楽活動を行った日本人音楽家は、朝鮮においても数多くの音楽会を開いており、その音楽会には在朝鮮日本人聴衆のみならず、朝鮮人聴衆にも観覧され、様々な評価もされていた。このような事実から、彼らの音楽会は韓国西洋音楽受容面において一つの側面を持っていたと考えられる。しかし、どのような日本人音楽家が、どのような音楽会を、いつ、どこで行っていたのか、などといった事実さえ把握できていない状況である。

日本人音楽家が植民地朝鮮で行った音楽会について言及された研究を確認してみると、藤井浩基（2008）、イ・キョンブン（이경분, 2011）がある。藤井は、1920年代から1930年代を中心に植民地朝鮮における日本人の活動を、音楽文化政策や音楽教育政策との関連から考察し、特に、アルト・ソプラノであった柳兼子の朝鮮での音楽会や朝鮮の師範学校の教員であった五十嵐悌三郎の教育活動を明らかにした。藤井の研究は、今まで研究成果が少ない朝鮮で活動を行った日本人音楽家に焦点を当てた点で大きな意義がある。しかし、1920年代から1930年代を中心とした時期のみに注目したため、朝鮮で音楽活動を行った日本人音楽家の音楽会の活動を全般的に捉えるには至らなかった。イは在朝鮮西洋音楽における日本人の影響について考察し、特に平間文寿の活動事例を中心に当時の音楽と権力（朝鮮総督府の政策）との関係を究明しようとした点で意義がある。しかし、日本人音楽家が植民地朝鮮において行った全体的な音楽活動の動向について触れず、35年に及ぶ日本の植民地支配期間の全てを朝鮮総督府の権力に焦点を合わせて論じたため、時期によっては解明すべき課題が残されている。

このように、日本人音楽家が植民地朝鮮で行った音楽活動に関する先行研究の状況を踏まえ、本論文では日本の音楽家が朝鮮を一時訪問して行ったクラシック音楽会の一部の実態を明らかにする。そこでまず、朝鮮におけるクラシック音楽会の概要を把握する。日本人音楽家の来朝音楽会の実態については、当時の朝鮮総督府の機関紙の役割を果たし、朝鮮語で発行された『毎日申報』を中心としつつ、朝鮮人経営者により発行された『東亜日報』の記事もあわせて参照し、どのような日本人音楽家が、いつ、どこで、どのような音楽会を開いたのかを確認する。また、それらの音楽会における朝鮮人観客層はどのような層であり、それらの音楽会に対する反応はどのようなものであったのかについて検討する。

第1節 朝鮮におけるクラシック音楽会の状況

日本人音楽家による音楽会について考察する前に他の外国人によるものも含めた植民地朝鮮におけるクラシック音楽会の状況を概観する。ここで注目したいのが、金永煥（ピアニスト、1893～1978）による『中央日報』連載記事である。金永煥は、平壤の大地主の家に生まれ、崇実中学を卒業後、日本の東洋音楽学校と東京音楽学校に留学し、帰国後は延禧専門学校音楽科で教鞭を執り、多くの音楽会に出演した。金永煥は、1974年4月19日から5月29日まで35回にわたり『中央日報』に「残したい話 (남기고 싶은 이야기들)」を連載した。これは解放前の朝鮮における音楽界について当時のエピソードを交えながら述べたもので、当時の西洋楽器、特にピアノの所有状況や音楽会の傾向とレベル、演奏会場などの音楽状況を知ることのできる数少ない証言でもある。その証言によると、1910年代の朝鮮ではまだピアノの数は少なかったという¹。規模の大きい教会にもピアノはなく、オルガン（風琴）の伴奏で礼拝が行われていた。そのような状況の中、朝鮮で行われる音楽会は「独唱や合唱などの声楽が中心」であったと金永煥は述べている。しかも、その音楽会のレベルは、学芸会の水準であったと、当時の状況を伝えている²。

韓国における西洋音楽受容史を執筆した李宥善は、植民地朝鮮で朝鮮人音楽家が出演した最初の西洋音楽会が開かれたのは1919年1月であったと述べている³。それは、1919年1月13日に開かれた京城楽友会創立音楽会（金永煥、洪蘭坡、金亨俊など出演）であった。東京音楽学校留学経験者の金永煥と洪蘭坡、ピアニスト金元福の父である金亨俊が出演したものであった。それ以前の音楽会は、主に、教会を中心とした音楽会、高等女学校やミッション系学校の学生による音楽会であった⁴。金永煥が学芸会水準と感じた1910年代後半の音楽会とは、教会の音楽会や女学校、ミッション系学校が行った音楽会のことであったとみてよい。

1910年代までは西洋音楽の音楽会はごくわずかしか開かれなかった。この時期の公演の中心は朝鮮楽で、主にパンソリや民謡といった演奏会と妓生や名人たちによるレコーディング、蓄音機の宣伝、妓生の紹介などが当時の新聞記事・広告に数多く載せられている。朝鮮楽の

方が西洋音楽より人気が高く、西洋音楽は一般的ではなかった⁵。

朝鮮人音楽家による本格的な西洋音楽の音楽会が開かれるようになるのは、1920年代以降のことである。1920年代はミッション系学校を中心に、日本の東京音楽学校に留学した金永煥、洪蘭坡、尹心恵、韓琦柱の演奏会が主に行われ、基督教青年会館（YMCA）と京城公会堂で公演が行われていた⁶。1920年代になると、音楽専門教育機関である梨花女子専門学校音楽科が設立され、数は少ないが金永煥や洪蘭坡のような留学生も帰ってきて音楽活動を本格的に開始した。梨花女子専門学校音楽科は、1925年の設立当初はピアノ専攻のみであったが、後に声楽とヴァイオリンの専攻が追加された。ほかには音楽教育専門機関がなかったために、梨花女子専門学校に入れない男子学生や同校音楽科が設立される1925年以前に音楽を専門的に学びたいと考えた学生たちは、留学を選択するしかなかった。

1910年代後半から40年代にかけての時期、朝鮮人音楽家による音楽会は主に基督教青年会館（YMCA）、京城公民館、京城府民館などで行われた。このうち京城公民館は観客座席数約500席の規模を誇り、1935年に京城府民館が竣工するまで、朝鮮での音楽会の多くがここを会場として行われていた。京城府民館竣工以後は、大きな音楽会は京城府民館で行われるようになった。京城府民館は、京城電気株式会社の寄付金により京城府民のために設立された複合的文化空間であった。大講堂の観客座席は1800席で、当時としては最高の規模と設備が整えられており、年中休館がないほど多くの団体が利用する場であった⁷。

朝鮮では、著名な海外の音楽家による音楽会もしばしば行われていた。著名な海外の音楽家による音楽会は、1923年2月開催のものを嚆矢とし、1920年代に数多く開かれるようになった。朝鮮を訪れた音楽家は、フリッツ・クライスラー（Fritz Kreisler）、ジョルジョ・ロンコーニ（Giorgio Ronconi）、ヤッシャ・ハイフェッツ（Jascha Heifetz）などであり、かれらの音楽会により、朝鮮におけるクラシック音楽界は質的、量的に大きく向上することとなった⁸。ヴァイオリン、チェロ、ピアノなどの演奏をはじめ、交響楽団の演奏会も行われるようになった。しかし、これらの世界的な音楽家は、朝鮮での音楽会開催が目的で来朝したとは必ずしもいえず、その多くは、日本での公演のついでに京城にも立ち寄って公演を行ったものであった⁹。その場合、たとえばヨーロッパの音楽家を朝鮮に招聘するための費用は、公演当日の出演料と1、2泊分程度のホテル代、京城－東京間の交通費のみで、直接ヨーロッパから音楽家を招聘するよりは費用の節約になった。

以上、植民地朝鮮におけるクラシック音楽会について概観した。海外の著名な音楽家によるクラシック音楽会の中には、無論日本人音楽家のそれも含まれる。そこで次節では、具体的にどのような日本人音楽家がどのような音楽会をいつ朝鮮のどこで開いたのかについて確認し、植民地という政治的状況において日本人音楽家の音楽会活動が持つ意義について考えてみたい。

第2節 日本人音楽家の来朝音楽会

本節では『毎日申報』¹⁰の記事や広告を中心に、どのような日本人音楽家が、いつ、どこで、どのような公演を行なったのかを明らかにする。当時、日本人音楽家の来朝音楽会は、毎日申報社や京城日報社の主催で行なわれるケースがほとんどであった。これらの新聞社は、朝鮮総督府の機関紙的存在である『毎日申報』（朝鮮語版）や『京城日報』（日本語版）の発行母体である。そのため、『毎日申報』や『京城日報』は、日本人音楽家による来朝クラシック音楽会の情報を多く伝えた。

『毎日申報』は、1920年から発刊された『東亜日報』や『朝鮮日報』より早くに朝鮮語版が出され、朝鮮が植民地になった1910年から1920年までの情報を含み、資料としての価値は高い。朝鮮語版であった『毎日申報』に掲載された日本人音楽家の音楽会の情報は、いち早く朝鮮人知識層に伝えられたと考えられる。一方、朝鮮人経営者により発行された『東亜日報』には、日本人音楽家による来朝音楽会に関する記事は少なく、朝鮮人や朝鮮の団体による音楽会に関する記事が中心となっている¹¹。

『毎日申報』を中心とした日本人音楽家の音楽会に関する記事や広告をまとめると、〈表1〉（文末）のようになる。〈表1〉を見ると、日本から朝鮮を訪れた音楽団体としては、東京音楽団、帝国大学音楽団、東京少女歌劇団、戸山軍楽隊などがある。このうち、東京音楽団はそのような組織がもともと存在したのではなく、朝鮮公演のために東京音楽学校を中心とした音楽家たちを集めて組織した団体である。『毎日申報』1924年3月29日、4月11日の記事は、4月11日から12日まで京城基督教青年会館で朝鮮では珍しい公演が行われると伝えている。東京音楽学校卒業生で組織された東京音楽学校同声会と京城日報社、ソウルプレスが主催となり、演奏には東京音楽学校の教授をはじめ、同校卒業生が出演するという内容であった。

帝国大学音楽団は、東京帝国大学音楽部が組織した音楽団であった。『毎日申報』には1920年8月3、7、9日に広告が掲載された。その内容は同年8月8、9、10日にかけて京城公会堂で大演奏会を行う予定だというものであった。後援は、毎日申報社、京城日報社、京城楽友会であった。

東京少女歌劇団は、西本朝春と鈴木康義により結成された劇団である¹²。『毎日申報』1924年8月1日の記事によれば、約70名の大きな団体で来朝し、8月3日から京城劇場で公演を行うという。

個別公演としては、小倉末子、柳兼子、関屋敏子、山田耕筰、藤原義江、三浦環、佐藤千夜子などの名前が確認できる。彼らは当時日本で活躍する最高の音楽家で、日本の最高峰の音楽教育機関である東京音楽学校出身者が大半を占めている。〈表1〉にみられる個別に朝鮮を訪れた日本人音楽家のうち、小倉末子（ピアニスト）・田中平三郎（ヴァイオリニスト）・

辻久子（同左）・山田耕筰（作曲家）の4人以外はすべて声楽家で、独唱会を行っている。柳兼子、清水金太郎、関屋敏子、永井郁子、山田耕筰、佐藤千夜子、三浦環、ベルトラメリ能子はいずれも東京音楽学校出身者であった。また、声楽の関屋敏子、藤原義江、佐藤千夜子、ベルトラメリ能子はイタリア留学の経験もあり、作曲の山田耕筰はドイツ留学を経験している。柳兼子は、イタリアとドイツの両方に留学し、小倉末子の場合、神戸女学院を経て東京音楽学校に入学、その後中退しドイツに留学した。このように、彼らはヨーロッパでの活動経歴も持っていた。彼らの音楽会の多くは毎日申報社や京城日報社の主催で開かれた。彼らの活動を『毎日申報』の記事や広告で確認する。

小倉末子（おぐら・すえこ、1891～1944）¹³については、『毎日申報』1916年11月30日、12月13日、12月16日に演奏会に関する記事が掲載されている。1916年12月13日の記事には、組合教会朝鮮婦人会と京城基督教青年会などの主催により伝道資金を集めるため、同年12月18日には朝鮮ホテルで、19日は鍾路中央基督教青年会で音楽会が開かれると記されている。音楽会には、京城内にある有名な国内外の音楽家が全部出演する予定であり、珍しく大きい音楽会になると伝えた。

柳兼子（やなぎ・かねこ、1891～1984）¹⁴については、『毎日申報』1920年4月21日、5月3日、5月14日、1924年4月5日、4月7日、1927年10月9日に音楽会に関する記事が掲載されている。1920年4月21日の記事では、一流声楽家の柳兼子夫人が5月中旬に申原直（ピアノ）と共に朝鮮で公演を行うという情報とともに、二人の履歴が紹介されている。柳兼子は1912年に東京音楽学校を卒業した日本を代表する女性低音声楽家（アルト・ソプラノ）であると紹介され、申原直については1916年に東京音楽学校を卒業し、ピアノの名手として活躍していると紹介されており、以前朝鮮を訪問した小倉末子以来の名人音楽家の公演になるため期待されることが記されている。朝鮮側の主催で行われる約2回の公演における収入は慈善事業のため朝鮮側に全額寄付される予定で、日本メソジスト教会主催で行われる公演収入は旅費に使われるとされている。同年5月3日の記事には、柳兼子夫人の音楽会が京城青年会の主催で5月4日午後8時に朝鮮ホテルで行われると伝えた。その後、柳兼子は、1924年4月7日と1927年10月20日に独唱会を京城公会堂で開いた。

清水金太郎（しみず・きんたろう、1889～1932）¹⁵については、『毎日申報』1926年12月2日から4日にかけて、毎日申報社主催で清水金太郎氏、清水静子夫人が歌劇的音楽会を京城公会堂で行うとの広告が掲載されている。それによると、会費は普通券が2円で、学生は1円となっている。12月4日の記事によると、清水が行った歌劇的音楽会では徳恵翁主（1912～1989、大韓帝国皇帝高宗の皇女）が作った詩に清水が作曲した曲も歌ったという。

『毎日申報』に載せられた記事が最も多いのは関屋敏子（せきや・としこ、1904～1941）¹⁶であり、その記事は1927年5月22日、24日、26日、30日、1930年3月4日、6日、7日、14日、16日、18日、1934年7月6日の計11日に及ぶ。関屋の祖父は、アメリカの軍人・外交官

のルジャンドル (Charles William Joseph Emile Le Gendre) で、彼は1872年から1875年までに明治政府の外交顧問として務め、その後1890年から1899年まで朝鮮王高宗 (1897年から旧韓国政府) の顧問を務めた。ルジャンドルの墓地は当時京城にあり、関屋の祖父と朝鮮との深い関係があったことから、関屋の朝鮮での公演は彼女にとっても特別であったと思われる。『毎日申報』1927年5月26日の関屋敏子の記事の中には、関屋とその伴奏者の練習写真が大きく載せられ、関屋が京城に着いてすぐ歌の練習をしていると伝えている。同記事には「蓄音器景品」という欄があり、関屋の公演に蓄音器会社が蓄音器2台とレコード10枚を寄付したため、26日と29日に開かれる独唱会の後に、くじ引きで配るとある。また、同記事では関屋について「東都楽壇の名星」「半島楽壇の新星光」「京城楽壇では待ち受ける本社主催の女流声楽家」「世界的一流歌手」「最高芸術賞を受賞した世界楽界の名星」「関屋嬢来城で各方面の大声援」などと評しており、朝鮮の音楽界が彼女に大きな関心を寄せていたことがわかる。同年3月16日の記事では17日の独唱会をミラノ座 (スカラ座) 出演時と同じ椿姫の扮装で行うと伝え、朝鮮にはまだ珍しいオペラの扮装をみせることになった。また、同年3月18日の記事では、17日の関屋の独唱会が1500名の聴衆で大盛況であったと述べており、朝鮮音楽界における関屋に対する関心が高かったことが読み取れる。

永井郁子 (ながい・いくこ、1893~1983)¹⁷については、『毎日申報』1928年4月22日、25日に毎日申報社主催の独唱会についての記事が掲載されている。1928年4月25日の記事によると、永井の独唱会は毎日申報社主催で27日午後7時から京城公会堂で行われる。独唱会には、ピアノの大平雪子、ヴァイオリンの大場勇之助の賛助をはじめ、当時、朝鮮で活動していた邦楽家の古本竹陽と佐藤令川、大田好子による尺八、箏の後援出演も予定されていた。

山田耕筰 (やまだ・こうさく、1886~1965)¹⁸に関しては、『毎日申報』1929年4月13日、15日、16日に山田耕筰の作品発表演奏会の広告が掲載されている。その内容は、1929年4月15日、16日に京城公会堂で「山田耕筰作品発表演奏会」が毎日申報社と京城日報社主催で行われるというものである。会員券は、1、2、3円の三種類で、ピアノに山田耕筰、ヴァイオリンに黒柳守綱、ソプラノに浅野千鶴子で演奏会が行われるという内容であった。

藤原義江 (ふじわら・よしえ、1898~1976)¹⁹に関しては、『毎日申報』1929年11月7、8日、1932年10月20、21、24日、1934年5月5日に独唱会の広告が掲載されている。その内容は、1929年11月14日に毎日申報社主催で、京城公会堂で独唱会が行われるというものであった。また、1932年10月23、24日には毎日申報社・京城日報社の主催で「藤原義江第六回帰朝独唱会」が開かれるという広告もある。会員券は、1、2、3円の三種類で、3年ぶりに朝鮮に来たと伝えられている。独唱は歌劇を中心にを行い、10月24日2時に行われる歓迎茶葉会に参加するという。1934年5月7日も毎日申報社主催で、京城公会堂で独唱会が行われると伝えた。1934年5月5日広告には、藤原について「日本楽壇に彗星の如く表れ世界的歌手としてその存在を知らせ、声楽家として12年目を迎えた」と記述されている。

佐藤千夜子（さとう・ちやこ、1897～1968）²⁰に関しては、『毎日申報』1930年9月19、21、23、24日に独唱会の広告が掲載されている。その内容は、毎日申報社主催により9月22日に京城公会堂で独唱会を行うというものである。

三浦環（みうら・たまき、1884～1946）²¹に関しては、『毎日申報』1932年9月10日に、朝鮮日報社の招聘により10日に京城公会堂で独唱会を開くという記事がある。また、1937年5月18日の記事は、同月26日と27日の2日にわたり朝鮮で最初のオペラ〈蝶々夫人（全幕）〉が上演され、三浦環のほか金永吉など40名が動員される大規模なオペラとなり、その伴奏には中央交響楽団が出演すると伝えた。

平間文寿（ひらま・ぶんじゅ、1900～？）²²に関しては、『毎日申報』1934年11月7日、15日の記事が、彼の弟子である全榮喆のデビュー・コンサートに出演することを伝えた。また、1935年11月10日は、平間文寿の略歴の紹介とともに現在活動を行っている様子を記事として伝えた。

ベルトラメリ能子（べるとらめり・よしこ、1903～1973）²³に関しては、『毎日申報』1936年1月28、30日に、毎日申報社と京城日報社の主催で2月3日に京城公会堂で独唱会が行われるという記事と独唱会のプログラムが掲載された。近代作家の作品を多く披露すると述べており、独唱会は4部に分けられ全16曲のプログラムが準備された。

このように植民地朝鮮では、三浦環や藤原義江など日本人一流音楽家による音楽会が開かれていたことが確認できた。しかし、このような新聞記事に掲載された音楽会の情報は、朝鮮で行われた全体の音楽会のうち、一部に過ぎない。『毎日申報』の記事・広告は日本人音楽家による音楽会を網羅的には掲載していないため、当時の朝鮮で行われた日本人音楽家の音楽会の全貌を把握することは難しい。しかし、『毎日申報』の記事・広告を通じて日本人音楽家による音楽会の実態の一部については確認できた。

では、これらの音楽会は朝鮮人にどのような反響を呼び、どのように認識されていたのだろうか。音楽会の観客層について次の節で考察する。

第3節 日本人音楽家による来朝音楽会の朝鮮人観客層

日本を含む外国から音楽家を招聘して行われた音楽会は、会場借用料に加え、公演者の出演料、宿泊料、交通費など高額な経費が掛かるため、入場料も高額であった。1923年にヴァイオリニストであるハイフェッツの招聘来演に関わった金永煥は、外国人演奏者のための旅費や宿泊費など金銭的な負担は大きかったと証言している²⁴。このように、高額の経費が必要となる世界的に有名な音楽家を招聘することは、その費用を負担できる機関、当時としては日本人が経営する毎日申報社や京城日報社の後援なしでは不可能な状況であった。当時、日本人や外国人音楽家による音楽会の入場料は、座席によって1円から3円ほどであった。た

例えば、1929年4月15日に開かれた山田耕筰の音楽会と関屋敏子の音楽会²⁵においては入場料1円、2円、3円という3つの区別が設けられていた。

では、当時の朝鮮における音楽会の入場料は、人々にどのくらい負担になる金額であったのだろうか。1920年代の朝鮮人の生活実態を確認してみたい。早稲田大学を卒業し、朝鮮銀行の書記を経て京城織紐会社の支配人を勤めた鮮干全は、『開闢』の論説で、1920年代の中流階級を年収「千円」以上と設定している。鮮干全は、京城府が1921年度に「学校費戸別割等級表」を基に調査した収入に関する資料を取り上げ、朝鮮人の社会的な階級を年収により特殊階級、上流階級、中流階級、下層階級に区別した²⁶。鮮干全の論説による中流階級の下限線である年収1,000円以上の所得を得るためには、毎月83円以上の収入が必要となる計算になる。

ところで、1922年発表の鮮干全の上記論説から約10年後の1933年に、朝鮮人とみられる高等普通学校教諭の家計簿が新聞に公開されており注目される。約10年間の物価変動やインフレーションの進行などを考慮に入れる必要はあるが、当時の中産層家庭の金銭的な支出について参考になる。それは『毎日申報』1933年10月7日付「家計簿公開：6人家族の85円高普教諭の家計」という記事である。それによると、高等普通学校教諭の月給は85円であった。それに対する毎月の支出のうち、新聞代が2円、雑誌代が3円40銭、娯楽費が3円、預金が5円となっている²⁷。6人家族が毎月娯楽費として使える金額が3円であったことからすれば、一人当たり2～3円の独唱会やヴァイオリン演奏入場料の値段は、高等普通学校教諭の家庭においてもかなり高額に当たるものであった。

クラシック音楽は、主に知識層により享受されたと考えられる。ここで、植民地朝鮮における全体的な教育水準を確認してみると、朝鮮人の普通学校就学率は、1911年には1.7%に過ぎなかったが、1940年には45.7%まで増加した。1944年の時点で男子人口中、学校教育を受けた経験を有する者は33%に過ぎず、その中で中等教育を受けた者は1.3%（約16万2千名）、高等教育を受けた者は0.2%（約2万5千名）に留まった。女子の場合、その数はさらに少なく、学校教育を受けた経験のある者が全体の11%、そのうち中等教育を受けた者は0.3%（約3万7千名）、高等教育を受けた者は0.02%（約3千6百名）に留まった²⁸。

中高等教育を受けた知識層が、クラシック音楽会を享受する層となった。当時、朝鮮の中高等教育機関は、音楽部や合唱部、管弦楽団を持っており、これらの部活動を通じて定期的に音楽会も行っていた。朝鮮の私立高等教育機関で、主に朝鮮人生徒が通っていた崇実専門学校音楽隊や延禧専門学校音楽部、梨花女子専門学校、セブランス医学専門学校には合唱団があり、この4つの学校では合同で音楽会も行っていた²⁹。特に、崇実専門学校音楽隊や延禧専門学校音楽部、梨花女子専門学校合唱部の活動は盛んで、平壤や釜山など朝鮮各地での巡回音楽会も定期的に行なっていた³⁰。このように当時の朝鮮人の知識層であった各専門学校学生は、身近に音楽を楽しんでいた。彼らは音楽活動を趣味としながら、音楽を積極的に享

受する立場でもあった。

雑誌『三千里』では、1940年5、6、7月号において、梨花女子専門学校文科・音楽科、延禧専門学校文科、中央保育学校の学生たちによる文化鑑賞記を掲載した。そこで対象とされたのは、当時のエリート学生の代表的な趣味であった文学、映画、音楽分野であった。音楽分野では、クラシック音楽を鑑賞の対象としていた³¹。実際に鑑賞記を執筆した学生には鄭熙錫、成福順、李順女、嚴成業、崔福女、裊貞順などがいた。特に、鄭熙錫（延禧専門学校文科）は、自身が実演をみる機会があった音楽家について執筆し、それは、藤原義江、鄭勳謨、クライスラー、エルマン（Mischa Elman）、ティーボ（Jacques Thibaud）、モギレブスキー（Yevgeni Mogilevsky）、朴景嬉、李愛内、任祥姫などについてであった。

鄭熙錫以外にも、梨花女子専門学校の成福順（文科）、李順女（音楽科）、鄭三英（音楽科）、嚴成業（音楽科）、崔福女（音楽科）、裊貞順（音楽科）、金金蘭（文科）は、自分たちが鑑賞した各音楽会について述べており、彼らは音楽会を享受できる階層であった。このように、朝鮮では専門学校以上の学歴を持つ一部の学生が音楽を趣味として活動をしており、音楽の愛好者として音楽会も積極的に享受できる階層であった。

朝鮮の高等教育機関の頂点に位置していた京城帝国大学にも校友会音楽部があり、管弦楽などの定期音楽会も行い³²、学生たちはクラシック音楽を愛好していた。1938年11月、京城帝国大学学生課が実施した「京城帝国大学学生生活調査」には学生の嗜好に関する調査も含まれており、注目される。調査申告を行った学生の実籍をみると、朝鮮人学生119名、日本人学生240名、台湾人学生3名、不詳1名となっている。調査内容は、大きく「身上」と「生活」に分かれており、そのうちの「生活」には、住所、食事、通学、スポーツ、健康、趣味・娯楽、学習、宗教などの項目があり、「趣味・娯楽」欄に音楽について記されている。

当時の在籍学生総数414名中、調査に応じた学生は363名（87.68%）であった。そのうち、趣味・娯楽部門（同一人が2種以上記入したものを採録、そのためこの答えの総数は743名になっている）において「音楽」が趣味であると答えた学生は77人で、これは映画（100名）、読書・囲碁（81名ずつ）に次いで3番目に多い³³。また、好む音楽の種類については、総数363名のうち、和楽を好む者は121名（33.33%）、洋楽を好む者は312名（85.95%）、和楽のみを好む者は29名（7.98%）、洋楽のみを好む者は220名（60.60%）、和洋共に好む者は92名（25.34%）、和洋共に好まない者は19名（5.23%）であると調査報告に記されている³⁴。

このように、京城帝国大学の学生は、本調査において好きな音楽の種類について約87%が西洋音楽を好きだと答えた。本調査は、当時、朝鮮の高等教育機関の頂点に位置しているエリート集団に対する調査結果で、大きな意味を持っている。

京城帝国大学法文学部の出身である小説家の李孝石は、クラシック音楽の愛好家として知られており、彼が書いた『碧空無限』においてもクラシック音楽の知識がふんだんに盛り込まれている。『碧空無限』は、満洲のハルビン交響楽団を京城に招聘するストーリーを描いて

いる。これは1939年に京城で最初に行われた本格的な交響楽団の演奏会をモデルにしたものであり³⁵、李孝石がクラシック音楽愛好家として実際に演奏会に多く出席していた経験があればこそ執筆できたものであった。また、李孝石の親友で同じく京城帝国大学出身の俞鎮午の小説『華想譜』でもクラシック音楽が描かれている。東京音楽学校声楽科を経てドイツのベルリン音楽院に修学し、ヨーロッパ各地でシューベルトやシューマンなどの歌曲を歌い東洋の鶯と呼ばれた声楽家が主人公の小説であった³⁶。近代朝鮮文学がクラシック音楽を背景に登場させていたことは、当時の知識層が自然にクラシック音楽を身近に感じていたことを代弁するものである。

このように、朝鮮において中高等教育を受けた学生を中心とした知識人層は、その多くが経済的に余裕もあった。彼らが西洋音楽を好むことができた要因の一つは、学校教育としての唱歌・音楽教育を通じて西洋的音楽を学び、音楽的な基礎を得たことにある。日本人中等音楽教員により教育を受けたエリート学生は、後にクラシック音楽を愛好できる層として定着したといえることができる。彼らは、後に官公署、学校機関、金融機関、新聞や雑誌社などに就職し³⁷、朝鮮のインテリゲンチアとしてクラシック音楽を享受する層となったと予想される。

以上、日本人音楽家による来朝音楽会の朝鮮人観客層は、中高等教育を受けたごく少数の知識層で、クラシック音楽の愛好家として音楽会を享受していたことが明らかになった。彼らは、朝鮮総督府による教育政策の下で、学校教育を通じて唱歌・音楽教育を学び、音楽的な基礎とクラシック音楽を理解できる素地を養い、後にクラシック音楽会を享受できる層にまで至ることができた。クラシックは、高級さや洗練性を表す代表的な音楽のジャンルとして知識層に認識され、そのような知識層により音楽会は享受されていた。

では、日本人音楽家の音楽会に対して朝鮮人知識層はどのように認識していたのだろうか。この点について次の節で考察する。

第4節 日本人音楽家の音楽会への朝鮮人の反響

日本人音楽家による来朝公演で多かったのは声楽をメインとする音楽会で、演目には歌劇（オペラ）曲も多く含まれていた。『三千里』1938年12月号には、朝鮮を訪れた日本人を含む外国人芸術家について朝鮮の著名人が語る欄がある³⁸。その中で、音楽の部門は、毎日新報社会・政治部長、朝鮮日報編集局長・副社長兼主筆を歴任した洪鐘仁（1903～1998）が担当した。洪鐘仁は、日本人音楽家の藤原義江、三浦環、関屋敏子、ベルトラメリ能子やティーボなどの欧米人の音楽会についての回想を掲載した。これは、断片的であるが朝鮮の知識人による日本人音楽家の来朝公演を評したもので、日本音楽家による音楽会について評する文書が少ない中、重要な資料の一つである。では、洪鐘仁は日本人音楽家の音楽会についてどの

ように感じたのだろうか。

洪鐘仁は、藤原義江について「舞台に立った藤原の印象はととても良かった」「彼は才色を兼備したラッキーマン」「《カルメン》、《リゴレット》、《蝶々夫人》のような歌劇をてきぱきやり遂げる」「長く、細く声を出すのが彼の独特な才能と言えますが、それが逆に音楽的にみると低俗な感もなくはない」「日本情緒を現した歌を彼はとてもよく歌う」「藤原氏は日本には欠かせない尊い存在」と述べている³⁹。藤原は、イギリス人の外交官と下関の芸者の間に生まれた。洪鐘仁が藤原を西洋人のような格好の良さと歌で聴衆をひきつける力を併せ持つ「ラッキーマン」だと評したのはそのためである。また、楽譜などが読めないという噂について述べているが、それは明治学院と早稲田実業出身である藤原が、当時、日本の音楽界を先導していた東京音楽学校出身ではなく、音楽専門教育を受けていなかったために広まったのではないだろうか。しかし、藤原は「藤原ぶし」と呼ばれるほどの独特な歌い方をもっていた。それについて洪鐘仁は、「藤原ぶし」は低俗感があるが、日本の情緒をよく表す技法であると評価し、また藤原の存在を日本人に欠かせないものと論じた。

次に、洪鐘仁は三浦環について「巡回音楽家でもあり演奏家でもあり、芸術家でもある」「音声は銀盤の上に玉がころがるような綺麗な声の持ち主」「そんなに太った体でも舞台の上ではととても軽く、音声は綺麗で聴衆はまるで仙境にたどり着いたように恍惚となった」と述べた⁴⁰。洪鐘仁は、世界的にも名が知られた三浦環について巡回音楽家・演奏家・芸術家と評した。1915年8月19日の『毎日申報』には、三浦がイギリス「皇帝皇后」陛下の称賛を受け、ロンドンで月給2万4千円をもらったとの記事がある。洪鐘仁は三浦の声をとても綺麗いだと称賛し、歌う際には少女のように若く見えたと評した。なお、三浦環による1937年5月26日と27日の公演は、朝鮮で最初のオペラ〈蝶々夫人〉公演ということでも意味深く、金永吉⁴¹が相手役をすることでも話題となっていた。

また、『毎日申報』に日本人音楽家として最も多く取り上げられた関屋敏子について洪鐘仁は、「仏蘭西の人々がとても称賛したという関屋敏子氏の音声は、それほど感激するものではありませんでした。声は高いのみで、やわらかいところはありませんでした⁴²。」と述べ、声が高いだけで、世間で称賛されるほどの感激は感じなかったと評価した。しかし、当時の新聞では関屋を「世界的な一流歌手」と称し、京城での関屋の独唱会については「玄妙人神な音の魅惑 無我夢幻悦物」と表現し、関屋の独唱会を聴いた1,500名の聴衆は現実を忘れ陶醉し、大盛況をなしたと報じた⁴³。関屋が1927年5月26日の独唱会のために京城を訪れた時に、京城近辺に母の祖父であるセンドルの墓地を訪ねた⁴⁴ことが話題になったほど、関屋についての関心は高かった。しかし洪鐘仁は、当時の新聞などでされた評価とは異なり、世間で称賛されるほどの感激はなかったと評したのである。

さらに、洪鐘仁は、ベルトラメリ能子について「ベルトラメリ能子の音声はととてもゆとりがありました⁴⁵。」と述べるなど、主に声楽家を中心とした日本人音楽家の独唱会の感想を以

上のように語っている。

朝鮮を訪れた日本人音楽家は、日本でも一流とされる音楽家で、三浦のように世界的に有名な音楽家も音楽会を開き、その多くが独唱会であった。洪鐘仁は日本人音楽家の音楽会について自身の記憶に残る音楽家の一人ひとりを語り、観て感じたものを評した。特に、洪鐘仁の記憶に残った日本人音楽家の藤原義江、三浦環、関屋敏子による音楽会は、日本人音楽家による音楽会を代表する象徴的なものである。

ところが、当時日本人音楽家の音楽会について朝鮮人学生が語った文章がある。前出の『三千里』における専門学校学生による文化鑑賞記がそれである。それによると、梨花女子専門学校の学生は三浦環について「神聖な音楽舞台を汚す者」「年齢よりとても感情的」「その音楽と表情は理解できない」と記し、藤原義江については「朝鮮の音楽的水準を知らないのではないか」と述べている⁴⁶。また、延禧専門学校文科の学生は藤原義江について「それほどすっきりした感はなかった。朝鮮の音楽レベルもよく知らないようだ」「いわゆる缶詰音楽と呼ばれるレコードで聞いていたのを数ヶ月前に肉声で聞くことができた。曲目を見て大曲は氏の得意外なのか？あるいは聴衆のレベルを低くみたのではないか疑問に思ったが、実は後者により近く、また演奏態度もそうだったので本当に不快であった。高音の部分にいくと決まって半音ずつ低くするのも耳に障った。甘美であるべきピアノやピアノシモが薪の一本のように荒い。予想に外れず老衰してしまった。ステージのフォームは大家の風格が残っていた。日本の歌はよく歌った。」「レコードを通じて聴いたものより実演は良くない印象を与えた。洋曲よりは日本曲の方が良かった。氏の偏狭な自我流的な解釈は驚くほどであった。氏は真実な意味において自尊と傲慢をよく区別するのか」と述べている⁴⁷。中央保育学校の学生は、藤原について「豊かな音楽家タイプを持っている氏は名曲より民謡を歌えば一層いいと思う」「再度アンコールを受けたが尊敬する人物ではないようだ」と述べる⁴⁸など、学生たちは洪鐘仁の評価とは異なり、日本人音楽家による公演について酷評していた。これは、1940年代になると、高等教育機関に在籍する学生でクラシック音楽を愛好する者たちがクラシック音楽会を独自の視点で批評し得るほど、クラシック音楽に対する理解が深まっていたことを表すものとはいえないだろうか。むろん、こうした学生たちの酷評に民族的な感情も含まれていたことは否定できないだろう。

一方、朝鮮人に歓迎された日本人の音楽会もあったが、それは柳兼子の独唱会である。柳兼子が1920年5月4日に行った独唱会の様子について1920年5月6日付けの『東亜日報』の記事に、独唱会の会場は人が溢れるほど満員で、柳兼子の素晴らしい声と女優のような表情は感動するものであったとある。柳兼子の独唱会には、夫の柳宗悦⁴⁹が深く関わっている。柳宗悦は、1919年に朝鮮で起きた3.1独立運動に対する日本の弾圧の厳しさに憤慨し、日本本土の『読売新聞』に「朝鮮人を想ふ」を1919年5月20日から24日まで掲載し、朝鮮人に親しまれた日本人である。この記事をきっかけに、『東亜日報』主催で柳兼子の独唱会が開かれるこ

ととなり、夫の柳宗悦、パーナード・リーチ、母（勝子）とともに朝鮮に行くことになった⁵⁰。そして、先に引用した『東亜日報』の記事にあったように、朝鮮人に親しまれた柳兼子の1920年5月4日の独唱会は、大盛況であったのである。

1921年1月には、柳宗悦が『白樺』に「朝鮮民族美術館の建設に就て」を執筆し、同年5月に東亜日報社に東亜日報社主催の音楽会を依頼した。そして、同年6月4日に京城天道教中央会堂で柳兼子の独唱会を開くこととなった⁵¹。このような柳兼子の朝鮮での独唱会は「朝鮮民族美術館の建設」の趣旨とその建設資金を得るためであることから多くの朝鮮人の関心を集めたのである。次の朝鮮での柳兼子の独唱会は、1924年4月3日に京城の基督教青年会主催・時代日報社後援で行われた。その独唱会も盛況裏に行われたのである⁵²。その後も朝鮮人と親しい柳兼子の独唱会は、朝鮮各地でも行われ、朝鮮楽壇に大きな反響を及ぼした。

朝鮮人観客が多かった柳兼子の独唱会は、植民地朝鮮における日本人音楽家の公演の中で最も数が多い。柳兼子は、日本本土で女流音楽家として知名度が高かった。『淑女画報』1919年4月号には「音楽で名高き三女史」としてピアニスト小倉末子、久野ひさ子とともに柳兼子が掲載されている。柳兼子の音楽的な評価は、日本本土においても高かったのである。その柳兼子による朝鮮での独唱会は、夫である柳宗悦の朝鮮民族美術館設立と関連していた。柳宗悦の活動により、柳兼子の独唱会は東亜日報社、時代日報社、基督教青年会、京城メソジスト教会などの主催で、朝鮮人の好意的な関心を集め、開催されたのであった。来朝した他の日本人音楽家と異なり、柳兼子は朝鮮人聴衆に最も愛された音楽家であった。音楽器量も優れた柳兼子の独唱会に多くの朝鮮人聴衆が集まった。朝鮮各地で行われた柳兼子の独唱会は人気が高かった。

おわりに

本論文では、植民地朝鮮を短期間訪問した日本人音楽家によるクラシック音楽会が朝鮮の音楽文化において浸透したうえで、一定の貢献を果たしていたことを明らかにした。

1910年代に朝鮮人により行われた音楽会は、主に教会や高等女学校・ミッション系学校の学生などによるもので、独唱や合唱などの声楽を中心とした、金永煥によれば、それは学芸会の水準のものであった。朝鮮人による本格的な音楽会は、1919年に日本留学を経験した金永煥、洪蘭坡などが出演したものから始まるとされている。1925年には梨花女子専門学校音楽科が設立され、その後1930年代から日本や欧米に留学する朝鮮人音楽家が増え、演奏や創作といった朝鮮のクラシック音楽界の活動を果たすようになった。1930年代以降に行われた朝鮮人による音楽会の特徴は、声楽とヴァイオリンの演奏が多く、当時の朝鮮には歌劇（オペラ）団や交響楽団が存在しなかったため独唱、独奏、四重奏が中心に行われたことであった。また、1920年代に入ると日本人音楽家を含む世界的な音楽家が来朝公演を行うことにな

る。世界的な音楽家による音楽会は、ヴァイオリン、チェロ、ピアノなどの演奏をはじめ、交響楽団の音楽会も行われた。

植民地朝鮮ならではの当時の音楽の時代像をよく反映している日本人音楽家による来朝音楽会の実態を『毎日申報』の記事や広告を中心に明らかにした。来朝公演を行った日本人音楽家は、柳兼子、関屋敏子、山田耕筰、藤原義江、三浦環などであり、このことから当時日本で活躍する最高の音楽家による音楽会が多くを占めていたことがわかる。こうした音楽会は、ほとんどが毎日申報社や京城日報社の主催で行われていた。朝鮮で音楽会を行った日本人音楽家は、声楽家が多かったため、独唱会を開くケースが多かった。彼らの多くは東京音楽学校出身でドイツやイタリアなど留学経験を持っていた。

このような日本人音楽家によるクラシック音楽会は、植民地朝鮮で中高等教育を受けた学生を中心とした知識層で、経済的に余裕のある層により享受されていた。在朝鮮日本人を含む知識層は、朝鮮総督府による教育政策の下で学校教育の唱歌・音楽教育を通じて西洋の音楽様式を学び、クラシック音楽を理解できる素地を作ることができ、後にクラシック音楽を享受できる層にまで至ることができた。

日本人音楽家による音楽会に関する朝鮮人の評価は、音楽会の目的によって大きくわかれていた。中には、夫である柳宗悦の朝鮮民族美術館設立と関連して行われた柳兼子の音楽会もあった。特に柳兼子は、来朝した他の日本人音楽家と違い、朝鮮民族文化の後援という名目があったため、朝鮮人聴衆に最も愛された日本人音楽家であったとされる。

以上の考察から、当時のクラシック音楽会は、植民地朝鮮における朝鮮人知識層により享受されており、特に、日本人音楽家により行われたクラシック音楽会は一部の朝鮮人に受容されていたことが明らかになった。このような日本人音楽家によるクラシック音楽会は、中高等教育を受けた一部の人々に影響を与え、朝鮮にクラシック音楽文化が浸透するうえでも一定の貢献を果たしたと思われる。

今後の課題としては、植民地朝鮮に移住し音楽活動を行っていた日本人音楽家の音楽会の実態を明らかにし、日本人音楽家が植民地朝鮮で行った音楽会が当時西洋音楽界においてどのような意義を持っていたのか明らかにしたい。

【参考文献】

<新聞及び雑誌>

『東亜日報』『中央日報』『毎日申（新）報』『三千里』『開闢』『朝鮮と建築』『淑女画報』

<日本語文献>

京城帝国大学学生課編（1938）『京城帝国大学 学生生活調査報告』（朝鮮印刷株式会社印行）。

- 津上智実 (2010) 『神戸女学院創立135周年記念「100年前の卒業生」ピアニスト小倉末子の軌跡」展
図録』西宮市：神戸女学院「小倉末子展」実行委員会。
- 東京芸術大学百年史編集委員会 (2003) 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第二巻』東京：音
楽之友社。
- 日外アソシエーツ編 (2000) 『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和 (戦前) 編 す〜わ』
東京：日外アソシエーツ株式会社。
- 芳賀登他監 (1993) 『日本女性人名辞典』東京：日本図書センター。
- 朴燦鎬 (1987) 『韓国歌謡史 1895-1945』東京：晶文社。
- 平間文寿 (1977) 『歌の渚』東京：栄光出版社。
- 堀内久美雄 (1966a) 『新訂標準音楽辞典アーテ第二版』東京：音楽之友社。
- 堀内久美雄 (1966b) 『新訂標準音楽辞典トール第二版』東京：音楽之友社。
- 増井敬二 (2003) 『日本オペラ史〜1952』東京：水曜社。
- 松橋圭子編 (1987) 『柳兼子音楽活動年譜』(『民芸』昭和59年10月号〜61年8月号抜刷) 日本民芸協
会。
- 山口県教育会編 (1982) 『山口県百科事典』東京：大和書房。
- 荻原孝一「府民館の工事に就て」『朝鮮と建築』(1936年3月) 1〜10頁。
- 藤井浩基 (2008) 「音楽にみる植民地期朝鮮と日本の関係史—1920〜30年代の日本人による活動を中
心に—」大阪：大阪芸術大学大学院博士論文。

<韓国語文献>

- 오성철 (2000) 『식민지초등교육의 형성』서울：교육과학사。
- 李宥善 (1976) 『韓国洋楽百年史』서울：中央大学校出版局。
- 李宥善 (1985) 『増補版 韓国洋楽百年史』서울：音楽春秋社。
- 정선이 (2002) 『경성제국대학연구』서울：문음사。
- 신승모・오태영 (2010) 「식민지시기 ‘경성 (京城)’의 문화지정학적 위상에 관한 연구」『서울학연
구』第38集、서울：서울시립대학교 부설 서울학연구소、105〜149頁。
- 윤대석 (2008) 「제의와 테크놀로지로서의 서양근대음악-일제말기의 양악-」『상허학보』第23集、
서울：상허학회、115〜136頁。
- 윤대석 (2010) 「경성 제국대학의 식민주의와 조선인 작가-‘갈벽’의 심성과 문학-」『우리말 글』第
49集、大邱：우리말 글학회、275〜292頁。
- 이경분 (2011) 「일제시기 서양음악문화와 일본인의 영향」『音樂論壇』第25集、서울：漢陽大学校
音樂研究所、159〜186頁。

<その他>

www.history.go.kr (国史編纂委員会)

CD『浅草オペラ 華ひらく大正浪漫』(山野楽器、1998)の『ライナーノート』

注

- 1 『中央日報』1974年5月8日。
- 2 『中央日報』1974年5月1日。
- 3 李宥善 (1985) 158頁。
- 4 教会や学校での音楽会開催は、『毎日申報』の1915年8月28日「京城讚揚隊音楽会30日に青年会にて」や1917年1月7日「学生団の音楽会は盛況だった(平壤崇実大学校学生団)」などの記事からもわかる。
- 5 『毎日申報』1912年1月14、17、19、21日:「蓄音器 朝鮮音譜多数着荷一日本蓄音器商会(広告)」、1912年4月20、21、23、25日:「空前絶後の妓生歌舞一団成社開演」、1913年3月29日:「団成社にて妓生一同が演奏会」、1914年3月10日:「盆洞娼妓羅災演奏会 南門外娼妓の朝鮮演奏会、朝鮮では初めての見物」、1914年3月21日:「慈善演奏会は光武台一広橋妓生の朝鮮演奏会は団成社ではなく光武台である」。
- 6 李宥善 (1985) 168~171頁。
- 7 荻原孝一「府民館の工事に就て」『朝鮮と建築』(1936年3月) 2~10頁。
- 8 世界的な音楽家による音楽会については李宥善 (1985) 164~168頁を参照。
- 9 金永煥の証言によると、1923年に京城で行われたヤッシャ・ハイフェッツ (Jascha Heifetz) のヴァイオリン独奏会は、日本の公演を終えたあと金永煥が交渉した結果実現したという(『中央日報』1974年5月7日)。また、1934年に行われたレオニード・クロイツァー (Leonid Kreuzer、ベルリン音楽大学の教授を経て東京音楽学校教授を歴任) のピアノ独奏会も彼が大連の演奏を終えて日本に帰国する前に京城に立ち寄って公演を行ったものであった(『毎日申報』1934年4月25日)。
- 10 『毎日申報』は、1904年にイギリス人ベセル (Ernest Thomas Bethell、1872~1909) が創刊した『大韓毎日申報』を前身とする。1910年6月には李章薫が新聞社を引き受け、同年8月に題号を『毎日申報』と変更し、同年10月から徳富蘇峰が李章薫から引き受け監督となり、初代社長兼主筆として吉野太左衛門を任命した。1938年4月から題号を『毎日新報』に改称し、1945年11月に廃刊された。
- 11 『東亜日報』の記事は、国史編纂委員会のホームページ (www.history.go.kr) 上の韓国史データベースで検索した結果である。
- 12 増井敬二 (2003) 136~138頁。

- 13 小倉末子の履歴情報は、津上智実（2010）を参照。
- 14 柳兼子の履歴情報は、芳賀登他監（1993）1053～1054頁と堀内久美雄編（1966b）2014頁を参照。
- 15 清水金太郎の履歴情報は、日外アソシエーツ編（2000）1012頁とCD『浅草オペラ 華ひらく大正浪漫』の『ライナーノート』18頁を参照。
- 16 関屋敏子の履歴情報は、芳賀登他監（1993）596～597頁と堀内久美雄編（1966a）989頁を参照。
- 17 永井郁子の学歴や師事情報については、東京芸術大学百年史編集委員会（2003）1214頁を参照。
- 18 山田耕筰の履歴情報は、堀内久美雄編（1966b）1593～1594頁を参照。
- 19 藤原義江の履歴情報は、堀内久美雄編（1966b）1593～1594頁と山口県教育会編（1982）670頁を参照。
- 20 佐藤千夜子の履歴情報は、芳賀登他監（1993）495頁を参照。
- 21 三浦環の履歴情報は、堀内久美雄編（1966b）1872頁を参照。
- 22 平間の履歴情報は、本人の著書『歌の渚』（1977）336～340頁を参照。
- 23 ベルトラメリ能子の履歴情報は、芳賀登他監（1993）927頁を参照。
- 24 『中央日報』1974年5月7日。
- 25 『毎日申報』1927年5月26日。
- 26 『開闢』1922年2月第20号、45～55頁。「朝鮮人生活問題研究の其一」
- 27 『毎日申報』1933年10月17日。
- 28 オ・ソンチョル（오성철、2000）412頁。
- 29 『毎日申報』1928年10月13日には15日に連合で大音楽会を開くとある。
- 30 李宥善（1976）176～177頁。
- 31 「文化鑑賞記」のうち、音楽については、作曲家のショパン（Fryderyk Chopin）、ベートーベン（Ludwig van Beethoven）、シューベルト（Franz Schubert）についてと、演奏家・声楽家のクライスラー（Fritz Kreisler）、エルマン（Mischa Elman）、ティーボ（Jacques Thibaud）、モギレブスキー（Yevgeni Mogilevsky）、カルソー（Enrico Caruso）、藤原義江、三浦環、鄭勳謨、桂貞植、朴景嬉、李愛内、任祥姫の諸氏の音楽の中で聞いたものの感想を書くものであった。
- 32 『東亜日報』1931年12月6日記事には、京城帝国大学音楽部がマンドリン演奏会を同日2時から行うと伝える。また、『毎日申報』1937年5月22日、1939年11月16日、1941年11月8日字の記事においてもマンドリン演奏会や管弦楽の演奏会について伝えている。
- 33 京城帝国大学学生課編（1938）10～11頁。
- 34 京城帝国大学学生課編（1938）12～13頁。
- 35 ユン・デソク（윤대석、2008）119～121頁、ユン・デソク（윤대석、2010）285～287頁、シン・スンモ・オ・テヨン（신승모・오택영、2010）139～141頁。
- 36 シン・スンモ・オ・テヨン（신승모・오택영、2010）136～139頁。

- 37 京城帝国大学朝鮮人卒業生の就職に関しては、チョン・ソニ (정선이, 2002) 151~164頁を参照。
- 38 『三千里』1938年12月、129~131頁。
- 39 『三千里』1938年12月、129~130頁。
- 40 『三千里』1938年12月、131頁。
- 41 金永吉は、1909年平安南道中和郡出身で、1928年に陸軍戸山軍楽隊に入り、クラリネットを専攻、1934年には軍楽隊を除隊した。1933年には時事新報者主催の第2回音楽コンクールに「永田絃次郎」という日本名で出場し、入選、翌年行われたコンクールにも出場し第2位に入賞した。彼の美声について山田耕筰は賞賛し、1935年には日本青年館で独唱会を行い、三浦環との共演を果たした。1936年の公演では三浦の相手役のピンカートンを演じ朝鮮で関心を集めた。：朴燦鎬 (1987) 299~304頁。
- 42 『三千里』1938年12月、131頁
- 43 『毎日申報』1930年3月18日。
- 44 『毎日申報』1927年5月26日。
- 45 『三千里』1938年12月、131頁。
- 46 『三千里』1940年5月号、180~187頁。
- 47 『三千里』1940年6月号、174~185頁。
- 48 『三千里』1940年7月号、186~191頁。
- 49 柳宗悦 (やなぎ・むねよし, 1889~1961) については、日外アソシエーツ編 (2000) 2034頁などを参照。
- 50 松橋圭子 (1987) 18~19頁。
- 51 『東亜日報』1921年5月6日、24日、27日。
- 52 『東亜日報』1924年4月3日。

植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会

<表1> 『毎日申（新）報』にみえる日本人音楽家の演奏活動記事

年	月	日	面	記事タイトル及び広告
1916	11	30	3	名誉ある音楽家小倉嬢 来る19日に入京する
	12	13	3	小倉嬢の演奏 京城青年会の主催
	12	16	3	楽壇の明星 小倉嬢の称赞
1919	7	17	3	同志社大学音楽隊の来京、18日と19日の夜
	7	18	3	同志社大学音楽団演奏、本日午後8時から日本基督教会で
1920	4	21	3	一流の 声楽家 兼子夫人来鮮
	5	3	3	柳兼子夫人音楽会（東亜日報社主催）
	5	14	3	柳兼子夫人の告別独唱会
	8	6	3	東京帝国大学音楽大演奏会、長谷川町公会堂（8月8日、同9日、同10日、午後7時から）（広告）
	8	7	3	同上（広告）
	8	9	3	同上（広告）
1924	3	29	3	楽団の名星を網羅した東京大音楽団（東京音楽学校同声会・京城日報社主催）
	4	5	3	柳兼子夫人 独唱会盛況（東亜日報社主催）
	4	6	5	音楽会延期（東京音楽学校同声会）
	4	7	3	兼子夫人独唱会（今晚7時公会堂内にて）
	4	10	3	楽団の名星を網羅した東京音楽団入城（太平通基督教青年会館にて、毎日申報社・京城日報社・ソウルプレス後援）
	4	11	3	東京音楽団大演奏会（本日午後7時に開演）
	8	1	3	日本少女歌劇の祖宗一東京少女歌劇団（約70名の大きい団体で8月3日から開幕）
	8	4	3	東京少年歌劇団（写真）
1926	12	2	2	満都人氣が集中される清水金太郎氏清水静子夫人歌劇的音楽会（長谷川町公会堂にて、毎日申報社主催）（広告）
	12	3	2	同上（広告）
	12	4	4	清水氏音楽会終了（写真）
1927	5	22	2	関屋敏子嬢声楽会（26日と29日、二日間公会堂にて）
	5	24	3	南欧風景のような情熱の肉声（関屋敏子）、（写真）
	5	26	2	東都楽団の明星（関屋）敏子嬢の独唱会（初日は今26日夕）（写真）
	5	30	2	敏子嬢告別音楽会（関屋敏子）
	8	16	3	慶子嬢童話と民謡の夕20日公会堂にて（中村慶子、長谷川公会堂）
	8	20	3	中村慶子嬢入城（写真）
	8	22	2	神音妙曲で聴衆熱狂中村嬢音楽会、盛況で終わる。中村慶子嬢童謡民謡放送（22日夜、毎日申報社・京城日報社主催）
	10	9	2	柳兼子夫人独唱会20日公会堂
1928	4	22	2	日本が生み出した世界的名歌手永井郁子女史独唱会。伴奏は大平雪子嬢（広告、毎日申報社主催、写真あり）
	4	25	3	ソプラノ名歌手永井郁子独唱会（27日夜公会堂にて）

1929	4	13	2	世界的楽聖 山田耕筰 作品発表演奏会：山田耕筰ピアノ、黒柳守網ヴァイオリン、浅野千健子嬢ソプラノ、京城長谷天町公会堂（広告）
	4	15	2	楽壇の最高構成山田耕筰氏大音楽会 4月15、16日京城公会堂にて（広告）
	4	16	2	同上（広告）
	11	7	2	藤原義江独唱会（11月14日夜6時、長谷川町公会堂）（広告）
	11	8	2	同上（広告）
1930	3	4	7	世界的一流歌手 関屋敏子嬢の公演—本社招聘で来16日に帰国後最初の来城（写真あり）
	3	6	7	最高芸術賞を受けた世界楽界の明星—半島今春楽壇を装飾するため来城する関屋嬢（写真あり）
	3	7	7	関屋嬢来城で各方面の大声援（写真あり）
	3	14	7	三日後に臨迫した関屋敏子嬢独唱会—良伴奏者で定評を継ぐ有島夫人
	3	16	5	関屋敏子氏の独唱会を待ちながら（蔡奎燁）
	3	16	7	ミラノ座出演時の椿姫扮装で演奏名夜に臨迫した関屋嬢の独唱会（写真あり）
	3	18	2	玄妙入神した音の魅惑 無我夢恍惚境—現実忘れ陶醉した千五百聴衆関屋嬢独唱会大盛況
	6	28	7	名提琴家 田中教授演奏会—賛助出演は蔡奎燁氏、28日来青閣にて（写真あり）
	7	2	7	来8日夜 来青閣で鈴木夫人独唱演奏会。金永煥、安聖教両氏も出演（写真あり、毎日申報社主催）
	7	7	2	鈴木美佐保夫人 演奏会曲目—世界楽界の名曲のみ選び、金、安両氏の練習（写真あり）
	9	19	2	楽団の天才 佐藤嬢の独唱会—今月22日夜京城公会堂にて（毎日申報社主催、写真あり）
	9	21	7	本社主催 佐藤千夜子独唱会プログラム22日夜京城公会堂（広告）
	9	23	7	今夜佐藤千夜子独唱会（写真）
	9	23	8	童民謡の使徒 佐藤嬢京城着 駅頭には百花燦爛
	9	24	8	佐藤千夜子独唱会盛況（22日夜公会堂にて）（写真）
1932	5	18	2	永井郁子女子独唱会臨迫。19日夜 於公会堂
	9	10	2	環夫人独唱会（三浦環）
	10	20	2	藤原義江氏の独唱会開催—23日午後7時に長谷川町公会堂（写真あり、毎日申報社招待）
	10	21	2	藤原義江 第6回帰朝独唱会（広告、写真あり）
	10	24	2	藤原義江 独唱会は今日！午後7時、場所は京城公会堂（広告）
1934	5	5	7	藤原義江独唱会—指定席3円 普通券2円 学生券1円（写真あり、毎日申報社主催）
	6	25	2	本社主催 伊太利民謡と『オペラ』の夜 7月1日夜 於公会堂（伊藤敦子、小野博）
	7	6	7	関屋敏子嬢独唱会 会員券3円、2円、1円。7月10日夕7時半公会堂（広告、写真あり）

植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会

1934	7	31	5	納涼音楽会 美声の待主、楽界権威総出 本社仁川支局主催（船越富美子（歌）高桑矢世子（ピアノ）、合谷恭吉（ヴァイオリン）出演）
	11	7	7	楽壇の新人 全榮喆デビュー 来十四日夕・於公会堂（広告、写真あり、平間文寿、古莊百合子など出演）
	11	15	7	民謡歌謡 歌劇の夜 会員2円 1円半 学生1円 今夕七時 長谷川町公会堂 平間文寿 全榮喆（広告、写真あり）
1935	11	10	7	ここに歌手がいる。ガスダルトンの激讚-東道楽壇重鎮として活躍する全榮喆君恩師 平間文寿氏
	10	3	2	戸山軍楽隊 市街を行進（写真あり）
1936	1	28	3	ベルトラメリ能子独唱会—2月3日午後7時長谷川町京城公会堂（毎日申報社・京城日報社主催、写真あり）
	1	30	3	本社主催ベルトラメリ能子独唱会曲目
1937	5	18	8	半島最初の『オペラ』蝶々夫人（全幕）公演 三浦環、金永吉以下四十名動員 伴奏は中央強行楽団が出演 本社公演二六・七両夜於府民館
1941	11	25	4	永田玄次郎 独唱会—優雅、情熱の歌手
	11	28	4	歓呼、旋風の中で 永田玄次郎 独唱会—伴奏は佐藤長助氏
	12	3	2	テナー永田氏 独唱会迎え4日入城
	12	13	4	鮮烈な声質の歌手—平間文寿 独唱会—15日府民館にて
	12	18	4	東京音楽学校出身 記念音楽会—軍人会館にて開催
1942	5	1	2	「機甲部隊の大打進」戸山軍楽隊演奏など多彩な行事—明日から機械化 国防協会主催（本社後援）（楽譜）
	5	5	3	戸山軍楽隊—雅楽と秘苑を拜観
	5	6	2	平間文寿門下生発表日 7日に
	6	23	2	日独 親善音楽会—ショルツ氏来城。明日府民館にて
1943	7	5	3	平間文寿氏告別独唱会—12日府民館にて開催
1945	3	8	2	平間文寿の独唱会演奏評
	3	30	2	辻久子天才少年提琴家。提琴家独奏会
	3	31	2	新井潔氏 独唱会
	4	15	2	新井潔氏 独唱会
	5	9	2	新井潔氏 独唱会

出典：『毎日申（新）報』

Music Concerts Performed by Japanese Musicians during Colonial Korea: A Study on the historical influences on Korean western music

KIM Jiesun

The purpose of this thesis is to examine the roles of music concerts performed by Japanese musicians in colonial Korea. This will be accomplished by surveying articles and advertisements on these concerts from Korean newspapers at that time.

The music concert held by Koreans in the 1910s mainly comes from church, students of girls'-school, mission school, etc. According to Kim Young Hwan (金永煥), there were mainly vocal music such as solo or chorus and the music concerts held by these schools were of standard level. A full-fledged music festival celebrated by Koreans is said to be participated by a professional musician, Kim Young Hwan, who had experiences of studying music in Japan in 1919. Ewha Women's College Music Department was founded in 1925. Since the 1930s, more Korean musicians were studying in Japan, Europe and the United States and began to play in Korea's musical scene. However in the 1920s, famous musicians around the world including the Japanese, performed in Korea. Music concerts performed by these musicians included performances such as violin, cello, piano, and music concerts of symphonies in Korea. Korean Music concerts held after the 1930's were characterized by having many vocal and violin performances, solo performances and string quartets since there were no opera groups or symphony orchestras at that time in Korea.

Japanese musicians who performed in Korea were Kaneko Yanagi (柳兼子), Toshiko Sekiya (関屋敏子), Kousaku Yamada (山田耕筰), Yoshie Fujiwara (藤原義江), Tamaki Miura (三浦環), etc. From this, many music concerts were performed by the best Japanese musicians active in Korea at that time. Most of these concerts were organized by the publishers of Mainichi-Shinpo (毎日申(新)報) and Keijo-Nitpo (京城日報) newspaper. Japanese musicians who performed music concerts in Korea were often vocalists. They sang in many solo concerts. Many of them were from Tokyo Music School (東京音楽学校) and had experiences of studying abroad in places such as Germany and Italy.

The classical music concerts performed by such talented Japanese musicians were experienced mainly by highly-educated elite Korean students. Highly-educated elite Korean students, including the Japanese students, politicians etc. in Korea, learned Western music through singing and music education in schools under the educational policy imposed by the Governor

General of Korea. This made it possible for Koreans to understand western art music better. As a result, it enabled Korean students to enjoy these performances.

In consideration, the articles and advertisements in “Mainichi-Shinpo” newspaper show that the Korean educated elite were active consumers of Japanese performed concerts though their thoughts on the concerts are varied. These concerts can be seen not only as influential to highly-educated Korean students but also a means of shaping the Korean musical scene at that time.